

熊本市の済々豊高が、海外で活躍できる人材を養成する文部科学省の「スーパー・グローバル高校」の指定を受けた。県内から4校申請したが、結果を見れば九州から3校（他は大分、宮崎）という難関だった。県の留学支援事業への応募が振るわない中、同校が国際教育に踏み出す意義は大きい。

この取り組みは、高校生の社会課題への関心、コミュニケーション能力、国際的素養の強化が狙い。全国から246校が申請、56校が選ばれた。育てる人材像は、国際機関職員、起業家、グローバル起業経営者、政治家、研究者などだ。

済々豊高の計画は、地球温暖化、大気汚染、廃棄物処理など地球的課題と水俣病、越境汚染、地下水保全など地域課題をテーマに設定。日本の歴史・伝統文化を含め、英語で議論・発表できる力を養うものだ。

今年の1年生から数十人を募集して今秋スタート。来年度からは入学

国際教育に挑む済々豊高

時から募集し、年間80人、5年間で約400人の育成を目指す。

政府がグローバルな人材育成を急ぐ背景には、国勢弱体化への危機感がある。2012年の米国留学数は1位中国、2位インド、3位韓国。国際学会では中国の学生の発表が目立つ一方、韓国は済州島に大規模な英語教育特区を建設し、英語による教育を組織的に進めている。ただ、英語で授業といっても留学経験もない生徒に討論・発表できる力をつけさせるのは容易ではない。異なった考え方を理解し、外国の人と自然に交流できる人材育成も課題だ。

課題への取り組みは大学で始まっている。熊本大医学・薬学教育部のHIGOプログラムが一例。日本はいやおうなくグローバル化の波にのみ込まれつつあると実感する。済々豊高は熊本大とも連携し、アジアに近い熊本の土地柄、世界最悪の公害を経験した教訓を海外で生かす教育も心掛けてほしい。（井芹道一）

射程